

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

No.40



タイの農村
にて撮影
坂本 鉄平

特集 / タイ・スタディーツアー報告	1
インタビュー / 濱谷一郎氏	
「バッタナ共同体」	6
JVC第2回会員総会より	7
財政緊急アピール	9

第2回タイ・スタディーツアー報告

ーアジアを知るために

この夏には第3回が実施される「スタディーツアー」。タイの現状がよく理解できると好評だが、いろんな都合で参加できない読者のために、第2回のツアーの日程順に行動と参加者の感想をまとめてみた。ぜひ、誌上追体験を。なお、「」内は、参加者に帰国後、書いてもらった感想文からの抜粋である。

●第1日（3月17日）成田発、バンコク着。SCC（Student Christian Center）泊。

今回の参加者は次の6名であった。

足立直美さん(大学生)。灰谷健二郎の愛読者。「子どもたちの姿を見ることによって、これからの自分の生きる姿勢を見つめ直してみたい。」と参加。

坂田太郎さん(高校生)。「本(「タイのこころ」)を読んだ限りでは、現状肯定的な仏教に問題があるのではないか。」と感じたとのこと。

樋田博さん(大学院生、JVC執行委員)。現地での活動を認識し、自分を異文化の中に置くことで、日本語教育などで接する難民の心に近づきたい。

長谷川清隆さん(大学生)。将来教師になって、「語学(英語)教育だけでなく、もっと世界に目を向けるよう指導する」日の助けとして……。

福岡敬子さん(社会人)。「この目で見ることによって、アジアに住んでいる一員として、何ができるか、何をなすべきかつかみみたいと思って……。」

茂利由紀子さん(大学院生)。「貧困とはどういう



サムヘツ村農作業の手伝い

ことなのか、そして、その状態をどう思っているのか、知りたいと思っています。」

以上女性3名、男性3名に、JVC東京事務所から熊岡路矢が同行した。ドンムアン空港にはJVCタイランドのメンバー(タウチャイ、伊藤)が出迎え。➤

➤「不安だったから迎えに来てくれていて、とてもうれしかった。」(坂田さん)



衝撃的だったサムヘツ村での生活

●第2日（3月18日）午前中、バンコク見物と事務所でオリエンテーション。午後、自由行動。夕方、夜行の普通列車でブリラムへ。車中泊。

●第3日（3月19日）朝、ブリラム着。ソントオ(トラックを改造した乗合いバス)でサムヘツ村へ。村では2人ずつ3組に分かれ、JVCのメンバー1人ずつと村人の家に分宿。

●第4日（3月20日）村で手伝い。同じ家に分宿。

最初の目的地、サムヘツ村はタイの東北部の農村地帯。「開発・近代化」はそれほど進行しておらずタイの貧しい村の典型と言える。

「電気も、時計もない。朝、にわとりのコケッコととも起き、日が沈めば眠る。まさしく自然共存の生活。灰谷氏の『小さないのちと対等である自分を発見できる』生活が、ここにはあった。

子どもたちは働いている。大きな子は、牛追いをしたり、織物をしたり。小さな子は自分より小さな弟妹のおもりをしていた。(小学校6年間で義務教育だが)4年生くらいで、学校をやめてしまう。子どもたちは、重要な労働力なのだ。」(足立さん)

「初めに気になったのは水のことだった。雨水か井戸水、池の水をわかして飲むのだけれど……。大丈夫なのか心配した。」(坂田さん)

「あの食事では一週間程度なら生活できても、一か月後には、きっとビタミン欠乏症になってしまう。

村での仕事は根気と力と知恵が必要で、(悪)知恵が必要な都会の仕事とは違う。でも、都会に憧れる気持ちが、村の若者にはあるようだ。

サムヘツ村の様子は、ひと昔前の日本の農村に似た印象を与える。」(樋田さん)

「この村の生活を見ていると、本当に必要なものは、一体何だろうと改めて考えざるを得ない。ポロシャツには動物のマークがなければならぬと信じて

いる考え方の異常さを、つくづく思い知らされる。

この村の人々の物の少なさを、短絡的に『貧しさ』に結びつけるべきではないと思った。」(長谷川さん)

「作物の豊かな実りを願い、みんなが健康で過ごせることを願って、自然に逆らわず、簡素にのどかに暮らしている村の人たちには、我々が失いつつある飾ることのない素朴な心、ぬくもりがあった。私が指のケガをしたとき、言葉の通じない私に、心配して菓草をさし出してくれた娘さんのやさしさは忘れられない。子どもたちの目には、都会の子どもたちには失われつつある生彩があった。」(福岡さん)

「彼らは、彼らの生活様式に従っているかぎり、必要なものは手に入れることができるのであり、不満をもっているようには感じられませんでした。

貧困とは、絶対的客観的な物差しではかれるものではなく、そこに生活する人々の主観によるものではないかと思いました。……単に物質的な貧しさをもって、貧しさと決めつけ“援助”という名で彼らの生活に介入することは、彼らの生活様式、即ち文化を否定することになると思います。」(茂利さん)

明るい笑顔に伝えてあげたい

●第5日(3月21日)朝、村を出発。ソントオ、冷房バスを乗り継いでバンコクへ。SCC泊。

●第6日(3月22日)バスなどでバナニコムへ。キャンプ訪問、日本語学校の授業参観。ホテル泊。

「検問があるくらい、厳しく侵入者を制限しているので、そんなに警戒しなければいけないほど、堅苦しい所なのかなあと思いつつ入ってみると、そんな所はみじんもない……。皆これから自分の知らない新しい国へ行くのに(不安なのだろうけれど)明るい顔をしていて、感じがよかった。」(坂田さん)

「人々の笑顔を忘れることはできない。定住国での生活に期待をふくらませ、熱っぽく夢を語っていた。」(長谷川さん)

「『なぜ日本に行きたいの?』という問いに対して、『日本は同じアジアだから』と答えた青年の言葉が忘れられない。」(足立さん)

バナニコムキャンプは、第三国へ定住するための許可を待っている難民を一時的に収容する(プロセ

ッシング&トランジット)キャンプである。

●第7日(3月23日)バンコクを経て、マハーチャイ港を舟で見学し、ワットヨカバツ村へ。民家泊。

ワットヨカバツ村は、タイでは比較的「開発」された農村で、僧侶がヤシの実から砂糖をつくることを考案し、村に現金収入の道を開いた。

「電気、水道の設備はあり、日用品は日本と同じ程度にそろっているようでした。(ただし、サムヘツ村ではなかった貧富の差もある。)」(茂利さん)

「テレビや扇風機もあって、快適な暮らしだった。僕の田舎みtainな感じだった。

ワットヨカバツ村のお坊さん達は、技術導入等もするから、お寺と村の人々との関係が深くなって当たり前だ。(主な生産物の)ココナツを導入したのもお寺のお坊さんだ。」(坂田さん)

●第8日(3月24日)バンコクへ。ホテル泊。

●第9日(3月25日)自由行動。SCC泊。

●第10日(3月26日)病院で健康診断。午後クロントイスラムへ。深夜帰国のために空港へ。

●第11日(3月27日)朝、成田着。

「バンコク。たくさんの車(ほとんどが日本製)が往来し、高いビルが立ち並ぶ都会。その一方で5人に1人がスラムに住んでいる。」(足立さん)

「スラムの家は、僕の部屋から机を取り除いたような感じだった。大きさは4畳から6畳。」(坂田さん)

「環境の貧しさをものともしないような、大人や子どもたちの明るい表情からは、力強いエネルギーさえ感じられた。」(福岡さん)

バナニコム日本語学校にて



たった10日間という短い期間でしたが、第2回スタディーツアーの参加者それぞれが強烈な印象を受けたようです。彼ら自身のなかでどのように受けとめられたのか感想をうかがってみました。(なお今回の参加者である足立さんと茂利さんは、都合がつかず出席されておられません。)



植田 博さん

— 今回の体験をどんな形で他の人に伝えましたか？

植田：そこが一番難しいところですね。私がタイから帰ってきて友人から、感想を聞かれることがあいさつのかわりでした。しかし、一部始終を説明するには長時間かかりますし、その場限りだと「面白かった」という話の域を出ない。それではというわけで、友人が下宿に来た時に写真の束をゴソゴソと引っぱり出して一緒に話をしたりしました。自分できっかけをつくっていく事も意外と大変でした。

坂田：いつも日本と対比させながら、家族に言っちゃうんだけど、やはり食生活と天候、それとタイの人の性格のようなことを話しました。高校の友人には言葉だけで伝えたのですが、家まで来てくれた人には写真も見せながら話をしました。それでもこうした問題（難民や東南アジアの開発）に関しては特に話してません。

長谷川：私の場合、アメリカへ2回ほど行ったことがあるのですが、ある意味で比較ができました。とにかく関心をそそるといふ点ではタイへ行った時の方がずっと良かったですね。普段あまり目を向けない東南アジアに自分で実際に行ってみるのもいい経験になりますよと友人には言ってます。あと、自分でスライドをつくったこともあって、それを見せる機会をぜひつくりたいと思い大学の一室で上映会をやりました。思ったより人が集まらなくて10人前後だったでしょうか。100枚ほどのスライドを見せながら説明していったのですが、それほど反響はありませんでした。結局（実際に行ったことのない）彼らの興味はタイの風俗とか生活のことなんですね。スライドと私の説明だけで、ちょっと表面的になった

こともあります。それから家族と親せきの人にも見てもらいました。私自身は特に強調するつもりではなかったのですが、サムヘット村で食器を洗うシーンが映し出された時、「あまりきれい（清潔）じゃないね。」という感想が出ました。どうしても日本の感覚で見ると、こうなってしまうんでしょうね。それと私は教員志望なので、教育実習に2週間（高校）行って来たんですが、担当の先生が理解のある方で、ここでもスライドの上映会を放課後やらせてもらいました。その中で1人の女生徒がいたく感激してくれて「私もいきたくなった。」と言ってくれた時はやはりうれしかったですね。

福岡：植田さんは「人に伝えるのは難しい。」とさきほどおっしゃいましたが、私の場合もそうでしたね。ある程度関心のある人だったら深くつっこんで議論できるのですが、普通の人だとすごく表面的な話になってしまうんですよね。私は手もとに写真もなかったのが話だけしたのですが、受け手がどういうイメージとしてとらえるかも問題です。「伝える」という面ではまだまだという気がします。妹とか近い世代の人は割と関心を持って聞いてくれましたが、全般的に見て「東南アジア」というとまだまだ関心が薄いので、非常に残念だと思います。

— あなた自身の中でイメージが変わりましたか。



坂田 太郎さん

坂田：全然予備知識もなく「知らなかった」というのが正直なところ。先入観を持たずに行っただけで全てが新鮮でした。今回の行程には、いろいろな場所が設定してあり、タイという国を一つのイメージで限定するわけにはいかないという気がしました。難民問題に関しては、パナニコム日本語学校という一つの現場しか訪れるチャンスがなかったので、意識の上では印象が薄かったように思います。話に聞くカオイダン・キャンプとは少々違っているようでしたね。

植田：私は初めての外国旅行だったわけですが、日

本語家庭教師としてJVCで活動してきたこともあり、「現状を確認できた。」という感じでした。今回2つの対照的な農村に泊めていただきお世話になったのですが、タイ国内での地域的な格差も肌で感じる事ができましたし、その中でしたたかに生きている人々がいるということも痛切に感じました。また「難民」という人々の存在を意識するならば、一面的ですけれども、日本へ定住を希望する人々とパナニコム日本語学校で接することができて良かったと思っています。また、バラバラになりパナニコムをぐるぐると回って難民の人たちと自由に話す機会が1時間ほどありました。日本に定住した難民しか知らなかった私にとっては、アメリカやオーストラリアへ行くという人々と会えたことは非常に新鮮でした。



福岡 敬子さん

福岡：非常にプラスになったと思ったのは、自分自身でも難民問題や貧困の問題に対する関心が深くなりました。今まではマスコミで、タイ・カンボジアの報道を見たり聞いたりしても聞き流してしまうことが多かったのですが、帰ってきてからすぐ身近な問題として捉えられるようになりました。それでも帰国後、いろんな本を読んでみたのですが、自分がいかにうわっ面だけしか見てこなかったのかということも感じます。貧困の問題にしても、漠然としたイメージしかなかったんですね。もっともっと厳しい状況にあるところも機会があったら訪れてみたいと思っていますところですよ。

長谷川：私もあまりタイについては知らなかった方です。予備知識といえば、タイへ行く前に読んで「タイのこころ」*1 ぐらいで、今年の内初めまで行こうとは全然考えてませんでした。ですから別に予想していたイメージというものもなかったですね。感想としては、ただ「ここにも人が生きてる、生活してるな。」という印象を受けました。「貧しい」というイメージはありませんでした。かえて精神的には日本の方がいびつなのではないでしょうか。

— 今回のツアーのあなたにとっての意味は？

福岡：その国（タイ）の「文化」に触れたということが、いろんな意味でプラスになっています。やはり外から日本を見ることができたということが大きかったですね。来月に、また友人と2人でインドへ行こうと思っています。自分自身の中で社会の底辺で生きる人々とかかわっていききたいというものがありますね。

樋田：私の場合、考え方が日本それも日本の将来に根ざしています。ですからそういった観点から、タイという国は、日本が引き返すための目印だと思います。様々な矛盾を内包しつつ奇跡的な経済発展を遂げた日本は、現在先進国の一つとなりました。しかし、どこかで引き返さなければならぬのではないかと考えています。まさにそのどこまで戻るかという基準をタイが見せてくれたと思います。

坂田：結果的にタイという国を少し知ることができたのが第一です。こういう国が世界の中の一つとして存在しているということを認識できました。先日テレビでタイを特集した番組が放映されたのですが画面だけでは豊かそうだなという印象を受けました。しかし、テレビの映像と実際に見るとでは大きな違いがありました。



長谷川 清隆さん

長谷川：アジアから見た世界とでもいうんですか、また「公平な眼」を一つ養えました。

— 楽しかったこと、つらかったことは？

樋田：楽しかったことは、やはりサムヘツ村の生活が旺盛でしたね。あの村で食べたものに集約されてしまいますが、トカゲとかアリンコの料理はおいしかったですね。つらかったことは、短い期間だったこともあり別にありませんでした。もっとつらい目に会うためには、長く滞在しなければならぬのでしょうけれど…。私自身、10日間、お腹がゆるみっぱなしだったので、下痢もまた楽しではないでしょうか。(笑い)

☆スタディーツアーのお知らせ☆

第3回 8月1日～8月10日(受付け終了)

第4回 来年の1月頃を予定しております。

申し込み、お問い合わせは、JVC東京事務所スタディーツアー係まで。

長谷川：言葉が全て通じたわけではありませんので表面的だったのかもしれませんが、サムヘツ村での生活が一番良かったですね。つらかったことは、やはり言葉ですね。私は、単独で今回のスタディーツアーより一足先にタイへ行ったのですが、英語が通じるのはホテルのフロントだけで、後は全くだめ。すぐく困りました。お腹がすいて、夜遅くまでやっているお店があるのかとか、本当にどうしたらいいのかわからなくて、それが一番つらかったですね。しかし、それを通りすぎるとなれちゃって逆に好奇心がわいてきました。

坂田：ぼくも槌田さんと一緒に、食事が楽しかったことですね。結局みんな楽しかったです。つらかったことは言葉が通じなかったことでしょうか。意思の疎通がうまくゆかないのはもどかしいですね。

福岡：つらかったことは、私の場合皆さんと逆で食事ですね。匂いとか味とか私には合わなくてどうもだめでした。次回再挑戦するには勇気がいるようです。それと、サムヘツ村で、「ありがとう。お世話になりました。」と自分の口から心情こまやかに言えなかったのはつらかったですね。それと私も疲れのせいもあって後半お腹をこわしました。

— 今後のスタディーツアーに望むことは？

福岡：いろんなところを見ることができたので良かったですね。特にサムヘツ村とワットヨカバツ村という対照的な2つの村を訪れることができたのは、いい経験になりました。私個人には、ちょっとスケジュールがハードだったかなと思えました。

坂田：パナニコムで、JVCの日本語学校だけでなく、UNHCR、他のボランティア団体の説明とか日本以外の国に定住を希望している難民の人々と接する機会をもうけて欲しかったです。

長谷川：もう少しバンコクの内部を見る時間を増やして欲しかったですね。それもスタディーツアーを始める前に。そうすれば、一つの視点ができたのではないのでしょうか。なんか日本から直接サムヘツ村へ行ったという印象を私は受けました。

坂田：そうですね。最後の日の自由行動の時間に、バスや地図を前もって確認しておいて、一人でバンコクを回ってみたいらしい経験になったと思います。

— それには、非常に慎重な行動が要求されますよ。

長谷川：難民キャンプ(パナニコム)での印象が薄かったわけですが、最初から一つの家族なり個人なり難民の人から自分の体験を話してくれる機会があったら良かったのではないのでしょうか。もちろん、苦勞してきた人たちですから、承諾してくれたららの話ですけど。

槌田：少しハードでしたけれど、スケジュールに関しては文句なしですね。無駄がないというか、多くの所を見せていただいたので、行ったかいがありました。言葉が通じない不安はほとんど感じませんでした。もし、JVCの東京・バンコク両事務所から同行してくれる人がいなかったら、半分も正確な情報を得られなかったのではと思います。感謝しています。— この体験をどう生かしたいと思いますか？

長谷川：何かのきっかけにしたいですね。いろんなきっかけになる可能性があると思います。私は教員志望なので、もし機会があれば生徒に話してやりたいと思います。その中で一人でも東南アジアに目を向けてくれる生徒がいれば、うれしいですね。

坂田：「生かしたい」というところまではいかなくても、できるだけ友人にアルバムの写真を見せて、こういう国もあるんだということを伝えたいと思っています。

福岡：日本と東南アジアの関係を考える具体的なきっかけをつくってくれました。この体験を実際にどう生かしてゆくかという、正直言って私の頭の中でも混とんとしています。つきつめれば、自分自身がどう生きてゆくかにつながってくるのではないのでしょうか。

槌田：もちろん、私も写真や文章で、スタディーツアーの経験を正確に伝えてゆく努力をしてゆかねばならないと思います。しかし、それは速効薬ではなくてジワジワと効いてくるものだとも思っています。— どうもありがとうございました。

・『タイのこころ』……スタディーツアー参加者への課題図書。タイの首相を務めたクリット・プラモート氏と常に大衆の側から体制批判を続けたチット・ブーミサク氏の対照的な2人の論文を紹介。複眼的にタイの社会構造を知るには格好の書。(シリーズ・アジアのこころ2, 発行めこん社, 田中忠治編訳。¥1,300)。



濱谷 一郎氏
映画カメラマン

— なぜクロントスラムなのですか？

濱谷：私は、映画カメラマンとして身を立てようと思い、修業を積んでいた時期がありました。その間、アシスタントとしてインドやタイにも行きました。その頃からというわけではありませんが、私自身の中に「倫理なき秩序なき日本」にいや気がさしていたようです。日本は確かに物質的には豊かになりましたが、その反面本来あるべき人と人とのつながりや、やさしさという点では逆に貧しくなったのではないのでしょうか。もともと私自身も、アジアに関心がありましたので、本当に人間らしい生き方を問い直す意味でクロントイスラムへ入りました。私の場合、「そこで人が生きている限り心は通い合うはずだ。」というのが信条ですので割と自然にスラムへは入って行きました。

昨年（1983年）の1月から5月まで、約4か月カメラを回しました。私はカメラマンですから、ファインダーを通して、あるいは肉眼を通して見たありのままを伝えるのが使命です。ただ、その際単に「物」として伝えたくないですね。全てを語りつくさないまでも事実に基づいた「情報」として伝えることができればと思っています。

— 自主上映会を開いた反響は？

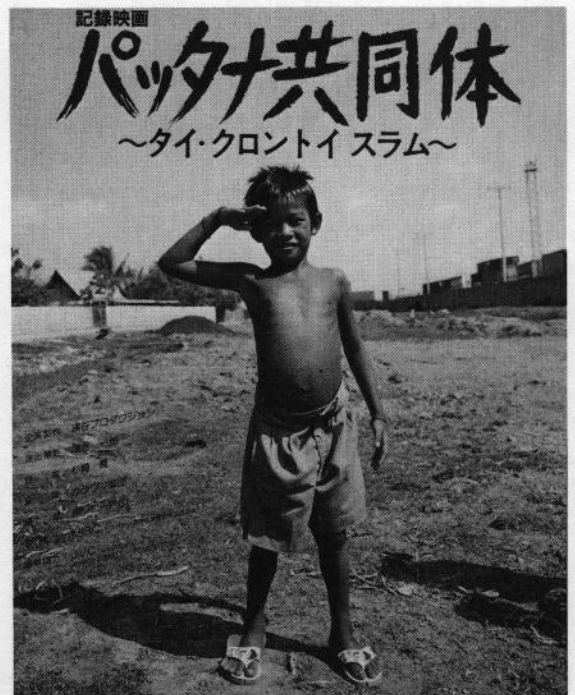
濱谷：これまで7～8回、集会所や学校で上映会を行ってきましたが、平均して20～30人の人が見に来てくれました。よく「なぜみんな子供たちの目が輝いているの？」と質問されます。私は別に強調したわけではないのですが、スラムに対するイメージとして「きたない」とか「子供たちの目はどこか不安げ」といったものがあるからでしょうか。とにか

く、生活は決して楽とは言えないけれども、人々が豊かな暮らしを夢みつつ精一杯生きている姿に、皆さん感動されるようです。それと、「何もしない方がいいのでは？」と質問されることがあります。もちろん、何もしない方がよい結果を生むことがあるでしょう。しかし、本当に彼らの自意識を目覚めさせ自立の道を開かせるための手助けだったら惜しむことなく手を差し伸べるべきです。私たち日本人も戦後、こうした時期を過ごしたはずです。

— この映画のどういう点を見て欲しいですか？

濱谷：私から、これとって要望することはありません。ただ、皆さんに見たままを感じとって欲しいと思います。そして事実を事実として受けとめ、どうしたらいいのかは、皆さんの胸の中で考えて欲しいとも思います。

— ありがとうございました。



※ JVCでは、「パッタナ共同体」と「国境をこえた人々 — カオイダン難民キャンプの記録」（両方とも濱谷氏撮影）のフィルムを有料で貸し出しならびに販売しております。詳細は JVC 東京事務所担当鶴田（ときた）まで。

JVC 第2回会員総会より

東京山手YMCA（1984年6月9日）

JVC 第2回会員総会が、東京山手YMCAにて開催された。事務局からの会員募集状況報告に引き続き、'83年度の事業・決算が報告され、また'84年度の事業計画、組織体制および予算案の提示がなされた。活発な討議の後、いずれも満場一致で承認された。また運営経費の不足、人材の発掘と育成、会員の中でも特に日本国内にいる会員の活動のあり方などが主な問題点として指摘された。この諸問題を解決するために最も重要なのは、会員一人一人の主体的参加である。

今後、活動そのものが専門性をさらに必要とするであろうが、JVCは閉鎖的な専門家集団であってはならない。会員それぞれが何らかの形で活動を担い、身近なところから自分達の経験や思いを伝えてゆく中に解決の道がある。

以下は、総会での発言、質疑応答の抄録である。

岩崎駿介（JVC代表）

「現在困っていることは、事務運営経費の不足とボランティアとしてJVCの活動に携わる人材確保の問題です。前者については、33,482,075円の84年度予算の内、20,582,075円不足しております。後者については、腰をすえ息の長い活動をするボランティアが少ないと同時に、新たにボランティアとして関わろうとする人たちの吸収がうまくいっていないこともあります。この問題を解決するために、事務局の活動だけでなく、会員の方々にもこの運動を盛り上げていただくことを切に希望します。

橋本保子さん（都社会福祉総合センター相談室）

差当っての課題は資金、特に運営経費だと思いますが、事務局はどのようなビジョンをお持ちでしょうか？

— 具体的には、①寄付の一部を運営経費に充当する、②大口寄付金の20%を運営経費に、③個人からの支援を得るためにフィルムの上映会やキャンペーンを行なう等々を考えております。（事務局）

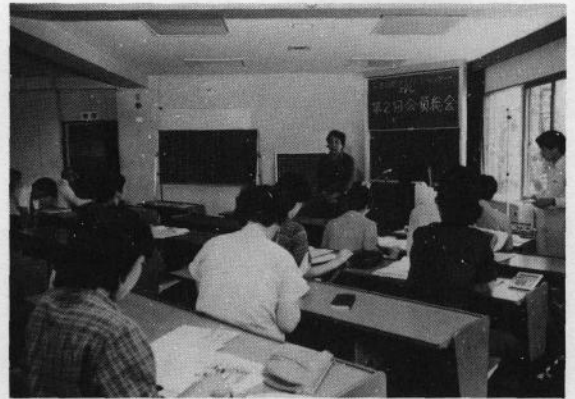
栗本 鳳氏（JVC執行委員）

ボランティア、特に海外で活動する人をサポートする必要があります。寄付金の20%を運営経費に充当するというだけでなく、ボランティアをサポートするために資金を募るのも一つの方法です。また他の能力を養うため、現在の活動者に研修の機会を与えてはどうでしょうか。

谷沢一江さん（JVC活動経験者）

日本国内の活動者会員の位置づけをもっと明確に

*詳しい議事録の入手を希望される会員の方には、お申し出頂ければ別途お送りいたします。



する必要があるのではないのでしょうか。一例として、地方の拠点づくりをしてもらうとか、できる限り一般会員になってもらうとか、働きかけるべきだと思います。

金子哲也氏（JVC活動経験者）

日本語家庭教師活動に関しては、従来会員に対して詳しい報告がなされていなかったと思います。これだけの予算（8,540,840円）が計上されたのなら、詳しい報告や要求が提示されるべきです。またJVCの設立の意図から考えれば、会員がやはりJVCをしょってゆくのだと思います。総会への委任状提出も45%ということで、会員の出席も少ないようですが、この点事務局はどのようにお考えですか？

— 日本語家庭教師に関しては、活動の拡大に伴い活動の調整と責任を持つ必要性が生じ、プロジェクトとして明確に位置づけました。（詳細は、本号付録1を御参照下さい。）また出席率に関しては考えられる原因として、遠隔地（外国の活動者も含む）の会員にとっての地理的困難さが考えられます。諸般の事情があると思いますが、私たちのJVCという認識を持ちつつ総会に出席していただくために、今後とも善処してゆきたいと思います。（事務局）

深津高子さん（JVC活動経験者）

日本の多くの人々の意識は身近なことのみで、世界的視野がないように思えます。私たち活動経験者は、これらの人々に自分の経験を伝えてゆく義務があります。また、自分で汗水流して行動するのがボランティアであるとの認識が一般的ですが、相手の自立を助けるボランティアが本当に必要とされていることも伝えたいと思います。

JVC '83年度決算報告と'84年度予算

① 1983年度決算報告

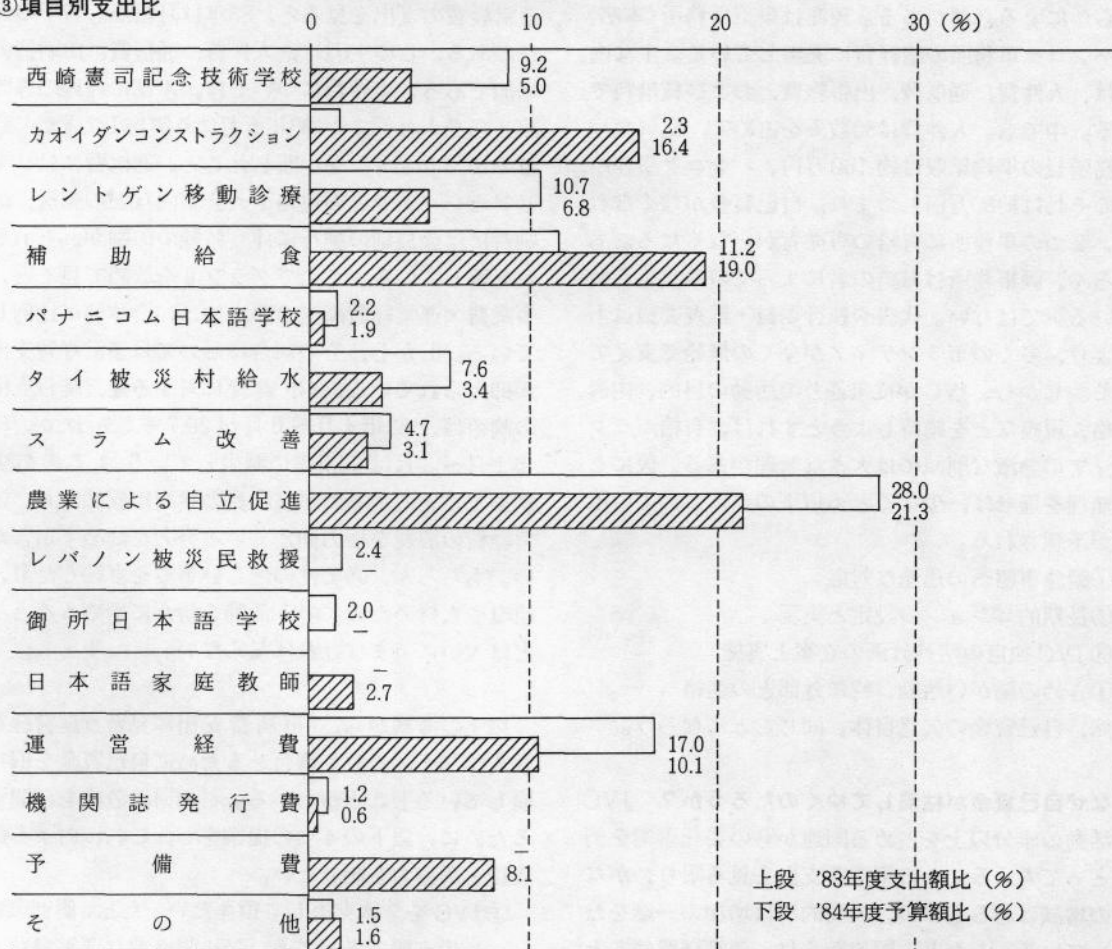
支出の部			収入の部		
科目	金額	構成比	科目	金額	構成比
1. 事業費	158,620,094	81.8%	1. 寄付金収入	167,468,148	92.8%
2. 運営経費	32,955,789	17.0%	2. 会費収入	2,017,551	1.1%
3. 機関誌発行費	2,445,693	1.2%	3. 機関誌頒布収入	3,060,020	1.7%
小計	194,021,576	100.0%	4. その他の収入	7,860,822	4.4%
当期収支差額	△ 13,615,035				
合計	180,406,541		合計	180,406,541	100.0%

② 1984年度予算

支出の部			収入の部		
科目	金額	構成比	科目	金額	構成比
1. 事業費	253,530,394	81.2%	1. 寄付金収入	302,200,000	96.7%
2. 運営経費	31,702,075	10.1%	2. 会費収入	4,200,000	1.3%
3. 機関誌発行費	1,780,000	0.6%	3. 機関誌頒布収入	2,700,000	0.9%
4. 予備費*	25,353,000	8.1%	4. その他の収入	3,265,469	1.1%
合計	312,365,469	100.0%	合計	312,365,469	100.0%

*緊急の場合に備えて事業費全体の10%を設定。

③ 項目別支出比



財政緊急アピール

代表 岩崎駿介

JVCは極めて深刻な財政危機に直面している。今までも幾度となく叫ばれてきた問題である。しかし現在、最悪の事態を迎えている。第2回会員総会でも討議されたが、会員はもとより、支援団体、個人、関係諸機関など、JVCの活動を支えている方々へ、改めてアピールしたい。

▶自己資金の欠乏が財政危機の根本である。 まずグラフIを見て頂きたい。委託資金が増加傾向にある一方、自己資金は月ごとに減少している。仮にグラフを延長すれば、今年末頃には自己資金がなくなってしまう。

▶自己資金の枯渇はJVCの活動をどう変えるのだろうか？ これを考えるには、先に自己資金の使途を明らかにする必要がある。現在は東京事務所(本部)とバンコク事務所の諸経費に充当している。主な内訳は、人件費、通信費、出張旅費、および賃借料である。中でも、人件費は50数%を占めている。(東京事務所員の平均年収は約160万円、バンコク事務所員のそれは約80万円)つまり、自己資金がなくなれば、2つの事務所の有給の専従者がいなくなる。もちろん、両事務所は有給の者によってのみ支えられている訳ではない。代表や執行委員・監査委員はもとより、多くのボランティアが全くの無給で支えている。しかし、JVCが従来通りの活動の目的、内容、性格、規模などを維持しようとすれば、有給ボランティアの急激な削減には大きな無理がある。仮にこの無理を通せば、少なくとも以下の点においての困難が予想される。

- ①緊急事態への迅速な対応
- ②長期的ビジョンの設定と実現
- ③JVC独自の活動計画の立案と実施
- ④きめの細かい活動、特に外部との連絡

当然、自己資金の欠乏自体、同じことになろう。

▶なぜ自己資金が枯渇してゆくのだろうか？ JVCの活動の半分以上を占める国連からの委託事業を例にとって考える。その事業費支出を見る限り、かなりの増減はあるものの、大局的には増加の一途をたどっている。しかし、国連からは、運営経費はもと

より、現地の事務所(宿舍も兼ねる)経費や現場の日本人ボランティアの人件費も拠出されない場合が多い。この傾向は、国連関係の事業に限らず、他の事業に関してもほぼ共通である。(’83年の寄付金の中で運営経費に使える分は7.3%)一般的に、事業が拡大すれば、事業費のみならず、これを支えるべき運営経費支出も増加する。各支援団体・個人が、事業費の15~20%前後を運営経費としても拠出して下さるなら、問題はない。しかし実際は、制度上の問題、理解・認識の不足により、これが難しい。従って、運営経費に充てるため、自己資金を取り崩してゆかざるを得ない。

▶運営経費を浪費してはいないのか？ グラフIIの運営経費の支出を見ると、’83年11月頃から若干の伸びがある。この主因は、人件費、通信費、印刷費の増加である。人件費については、本部に経理の専門家1名を入れ、また’83年5月より実施してきた“給与の10%カット”を中断したこと、通信費にはソマリアとレバノンとの連絡や入会案内などの郵送、印刷費には会員制の施行に伴う各種の印刷が、それぞれ影響している。ここでグラフIIを改めて見ると、事業費・運営経費両支出の増加は、全体的に比例している。しかし、その割合においては運営経費支出が抑えられている。(事業費に対する運営経費支出の割合は、’83年4月~6月が26.7%であったが、’84年1月~3月は20.0%に減少している。)この減少結果と、先に示した事務所員の平均年収額から、運営経費の浪費を極力抑えている努力を認めて頂きたい。もちろん、必要性の乏しい事業を継続したり、組織や人材のためにのみ活動を新たに始めることなどは大いに慎まなければならない。

以上の考察から、「事業費支出に見合う運営経費収入がなく、これを埋合せるために自己資金を取り崩している」ことがわかる。この財政危機を打開するために、以下の4つの提案をし、これに対する御支援・御協力を賜りたい。

- ①JVCを全体支援して頂きたい。たとえ個別事業への支援であっても、最小限必要な運営経費も

併せて支援して頂きたい。(具体的には、助成総額の20%前後。)

②各種募金の20%を運営経費に充てることを認めて頂きたい。また「JVC運営経費募金」にも御協力頂きたい。

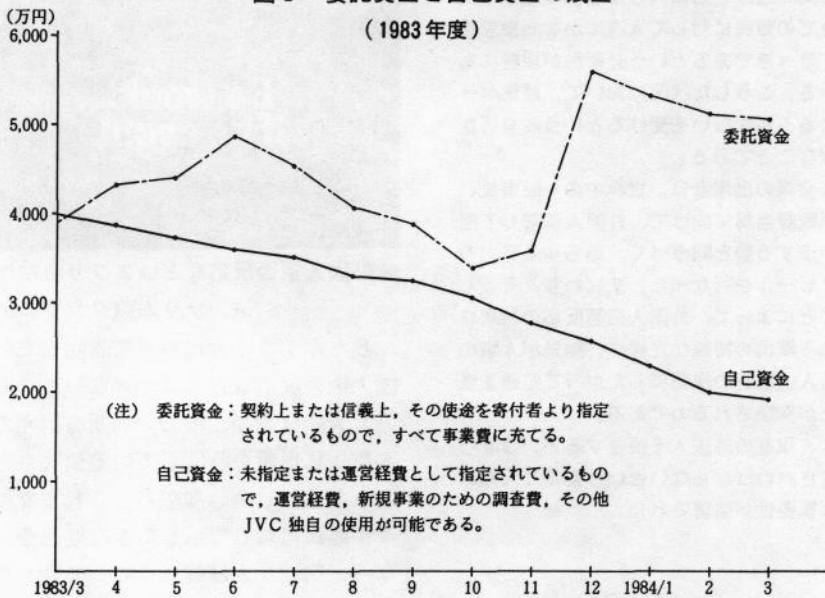
③自己資金としての会費収入を増やす。(具体的には、会員数の増加と一人一人の自主的な会費

の増額。)

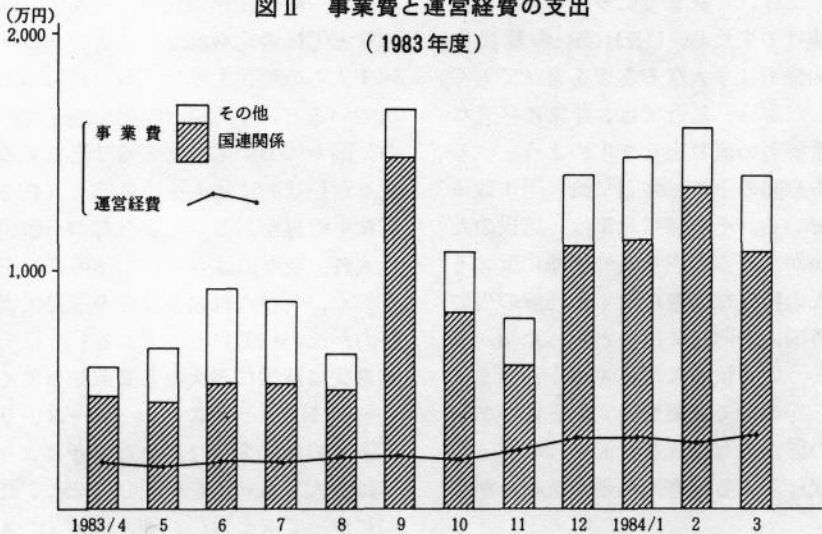
④日用品の再利用も兼ねて、身近な所でバザーを開き、その収益の一部をJVC自己資金へ充てて頂きたい。

事務所員も含め現場の者一同、最善の努力を続けるが、JVCを支える方々一人一人の御理解と御支援を重ねて御願ひするものである。

図Ⅰ 委託資金と自己資金の残金
(1983年度)



図Ⅱ 事業費と運営経費の支出
(1983年度)



外国人拒否反応の被害者・難民

円卓会議（ジュネーブ）1984年4月11日



— ジュネーブからのアピール —

国際連合欧州本部において「外国人拒否反応の被害者・難民」をテーマとした円卓会議が開催され、世界各地における外国人拒否の現状とこの問題に対処するための緊急措置の必要性について、意見が交わされた。

外国人拒否反応の及ぼす影響は、社会構造にとっても、またとりわけ難民にとっても極めて重大である。難民の置かれている非常に危うい立場というものは見落とされることが多く、時には、意識的に無視されることすらある。

世界各地で、難民問題はさらに大きな規模で起こり続けており、また全ての難民に対して人道にかなった思慮深い処遇を保障するべきであるという必要性が以前にも増して叫ばれている。こうした状況において、難民が外国人拒否反応による不当な扱いを受けるという成り行きはなおさらに残念なことである。

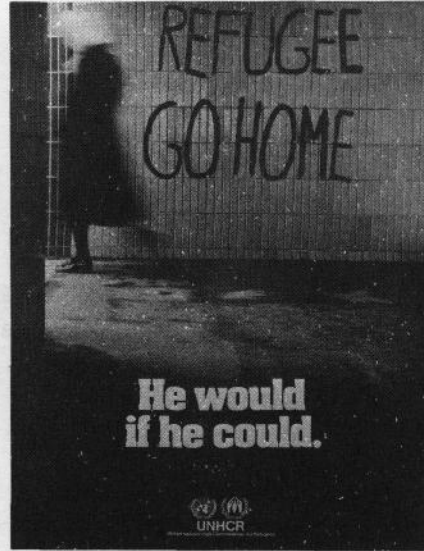
したがって、本会議の出席者は、世界中の一般市民、報道関係者および政府当局に向けて、外国人に対して拒否反応を示すというすう勢と闘うべく、あらゆる努力を払うよう切実なアピールを行なった。すなわち、そうした努力を続けることによって、外国人拒否反応の結果によって明らかになる難民の特殊な立場や、難民が人類の偉大な遺産である人道主義の規範にしたがって処遇を受けるといったことが保証されるのである。

本円卓会議では、現在の外国人を拒否するというすう勢から人権は尊重されねばならないという崇高な人類の遺産を守ることの重要性が強調された。

●警報が必要

— P. ハートリング（国連難民高等弁務官）

難民問題に関しては、これまでに多くの政府が寛容な政策をとり続けて来たし、UNHCRの難民に対する人道主義的努力に多大なる支援を寄せてもくられて来た。しかしながら、最近では、非常に残念なことには、亡命希望者の流れをせき止めようとする極めて明らかなる意図の下に、強固な流入阻止政策を打ち出し始めている。その様な政策は、難民のための国際的活動がかかげる人道主義的目標に反するものである。難民の特異な境遇に対する理解の欠如、彼らを他の居留外国人と同様に扱うといった傾向の現れでもある。そういう状況に即応すべく、今こそ国際社会から何らかの形で警報を発する必要がある。なぜなら、難民の置かれた特異な状況を理解することは、まさに難民に対する国際的活動の核心だからである。



帰れるもの
なら…

●外国人拒否反応などはアフリカにはない

— S. A. サリム（タンザニア、外務大臣）

我々がアフリカにおいて直面している問題は、外国人拒否反応などでは全くないと考えている。アフリカ大陸はおびただしい問題を抱えており、もちろん難民に影響を及ぼしている偏狭さというものもかなりある。しかしながら、これまでにアフリカの人々が難民に対して示してきた処遇をふり返って見るなら、アフリカは難民に対して最も寛容なる態度をとって来たことがわかる。アフリカの多くの国々において一般市民が難民の存在に不安感をいだいているなどとは考えられないことである。このことは、何千人もの難民を受け入れて何らかの対応をせまられているという大変な問題を抱えている（アフリカの）国々においても言えることである。もちろん、我々が伝統的に隣人を快く迎え入れるということ自体にも限界がある。しかしながら難民を理解して受け入れ、我々のささやかなる所有物を彼らと分かち合うべく、受け入れ国及びその国民によって多大なる努力が払われているのである。

●難民は我国に多大なる貢献をしてくれた

— B. クライスキー（オーストリア、元首相）

多くの難民を受け入れたことにより、オーストリアは多大なる利益を享受して来た。終戦直後にわが国にやって来た難民、例えばチェコスロヴァキア、

もしくは他の東欧諸国からの難民を例に取るなら、我々の目覚ましい経済復興及び発展は何にもまして彼らの働きに負うところが大きいと言える。卒直に言わせてもらうなら、私自身そのことを確信している。オーストリアは二度の大戦の間、極めて貧しい国であったが、今日ではたいへん豊かな国である。我国に来て新たな生活を築き上げることを余儀なくされた難民に対して、我々は感謝しなくてはならない。我国に居住するに至った何十万人もの難民は、我々の発展のために多大なる貢献をしてくれた。寛容なる政策は大きな利益をもって報いられるのである。

●国民を啓蒙する以外にはない

— F. M. ザラゴザ (スペイン, 元大臣)

外国人拒否反応の生じた、いきさつをたどることも結構だが、そういった過去のことよりもむしろ本当に問題となるのは未来に関してである。未来こそ、我々人類が創り出し、責任を持つべき最も重要な事柄である。それに、結局のところ、外国人拒否反応の問題と取り組むための恒久的方策は一つしかない。私は考える。国民を啓蒙すること、つまり、国民全体の啓蒙度を高めることである。これは全ての人々が尊厳をもった人間であることを認識することに他ならない。この両方からの人格育成による方法が、外国人拒否反応という慢性病の治療法である。

●新たな要因 — 経済危機

— J. ドルムソン (フランス, ジャーナリスト)

難民問題に、今、新たな要因が一つ加わった。外国人及び難民というものがそのまま敵視されてしまうような要因—経済危機がそれである。この危機を克服しない限り、外国人及び難民は困難な境遇に在り続けることになる。

社会学者が近年算定したところによると、居留する外国人及び難民の割合が一定線を越えると問題が起こって来るということで、その境界は14%ぐらいであるという。人口比で14%以内なら居留外国人の存在に圧迫感を感じないですむが、それ以上になると好ましくぬ状況をもたらさざるを得ないということである。しかしながら、我々人類が全く同種の者だけで集まり住む時代はもう既に過去のもので

ある。異質の文化との遭遇は我々の生活体験を豊かなものにしてくれる。

●国際社会における責務を

— 犬養道子 (日本, 作家)

私は自分の国の恥について語ろうと思う。というのは、私が自分の国を愛しているから、自分の国に国際社会の一員としての責任をもっともっと担ってほしいからに他ならない。国際社会において、日本はより活発な役割を果たさなくてはならない。まだ重要なポストについてはいない若者達に、私は大きな期待をかけている。いつの日にか日本も、この国際社会における責務という点で、今よりもう少し意識の高揚を図り、寄与し、より多くを担うことを願うものである。私達日本人をして開眼させ、もう少し国際的な思考法を身につけることを可能ならしめた恩人は難民の人々であると考えている。

●法規を適用する側の心構えが問題

— R. ライター (ジャーナリスト)

先程からの発言を聞いていると、どうも何か奇麗事に過ぎるという気がする。問題は、今日ここで発言をしている私達自身の豊かな国々にこそある。難民問題を管理するための法規というものが、現実には受け入れ国において、巧みにかつ強硬なやり方で適用されているということである。私達自身の国々において、難民が実際に空港という空港から敬遠されている現象、また彼らに与えられているものが一時滞在の許可であるということについて、今日ここでは言及されていない。官僚主義者がなおざりにしている点、おそらくは考えもしない点は何かということ、一時滞在の許可というのは不安定な状態に他ならないということ、そして、職探しや雇用に関して難民がどのような現状に置かれているかということである。UNHCRがより大きな権限を持つ必要性について、協定や法規をふやすという案を、私は大いに支持したいとは思っている。けれども、私達が注意すべきことは法規の適用自体ではなく、法規が実際にどのように適用されているかということ、つまり、法規を適用する側の心構えについてではないだろうか。

(翻訳—平井道子)

JVCプロジェクト

1984年 5月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民)	●技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。各3ヶ月、学生数約500名・基本的な技能訓練を通じて、本国帰還あるいは第三国定住していくカンボジア難民(15才以上)の自立を助ける。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル	ソムウェック・ルチャイシット トンディー・ソムカネ 稲垣三千穂
	●コンストラクション 給水=近くのダムから既存の配管までの4.5kmに対して給水配管する。 電気=夜間の安全のためにキャンプ外周に防犯灯を設置する。	UNHCR	金子一弘 永井聖子 バンチャ・ケオルディ パニット・ポティピ 斉藤 誠 松坂 優, 大村 卓
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民)	●レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。 ICRC(赤十字国際委員会)や、海外の医療団体との協力は順調に進行中で、2月からは、タブラヤ郡病院の農村巡回診療のプログラムに参加。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院	林 達雄 サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン ヨンユット・バンサーイ
	●ノンチャン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の栄養失調児、病人、妊産婦、乳幼児とその母親を対象とした補助食供給と栄養教育。 ノンチャン村へは、長時間留まることができないので調理はカオイダンで行なわれ、「ドライ・パック」(水分の少ない食物)として一週間分が現場へ運ばれる。	WFP/UNBRO	武田長久 イサラサック・ジャロンウォン ソンチャイ・ジャイピアン 荻野美智子、浜野敏子 スニー・サカオラット トンチャイ・クラタルムボン ピアラット・ヴィバストラ モントン
パナニコム (第三国定住持ち の難民一時収容施設)	●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション。	天理教千葉	佐藤和美, 鈴木絵里子, ティアン・バントゥー 池田剛太郎
タイ農村	●給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り、貯水タンクづくり、及び改良型ポンプの設置。	モラロジ-MIRC NTV 一般寄付	佐藤正喜 プナム・チャルンプリトゥム カモン・ミンムアン
バンコク市内の スラム	●スラム改善プロジェクト 奨学金援助:スラム児童のための学費援助 図書館:児童、成人のための図書館 建材提供:スラム立退き者への物資援助	モラロジ-MIRC NTV 庭野平和財団 今井記念基金 JOFIC 一般寄付	タウィチャイ・タムクナノン ソンボン・ブンヤバンチャ 伊藤真理子, 坂場由美子

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カンボジア (農村部)	●井戸掘り 東部・南部農村での井戸掘り	LWS	箕田健一
ソマリア (東アフリカ)	●農業プロジェクト マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 一般寄付	税田芳三(ソマリア事務所 長), 柴田久史, 山賀望幸 高橋一馬, 掛村 均
レバノン (中近東)	●医療ボランティア派遣プロジェクト及び緊急物資援助 4月30日をもって, 医療ボランティア派遣については無期延期。今後は現地のNGOと連絡をとりながら緊急事態における物資・資金援助に備えていく。		
人材派遣・養成プロジェクト			
シンガポール	●UNHCR-ホーキンスロード・ベトナム難民キャンプの管理・運営。	日本YMCA同盟 アジアキリスト 教会議	ニール・リー
ニカラグア	●ICM-移民受け入れ業務 (ICM と JVC の協約によるボランティア・トレーニング・プログラム)	ICM	福村州馬
フィリピン (パターン・ プロセッシング センター)	●ICM-難民定住にともなう医療業務 (同上)		竹内敦子
タイ	●マヒドン大学で熱帯医学研修中。	結城青年会議所	林 達雄
日本国内	●日本語家庭教師：定住難民の日本語学習援助 バザー, ハンディクラフト販売 *カオイダン「国境をこえた人々」上映運動 *スタディー・ツアー企画実施 第2回を3月17日から27日までの日程で実施した。参加者6名。	禅林寺 小山工業所 西本願寺(高岡 寺青) 一般寄付	森山久寿子 他約30名 関田鶴子 他約20名 鴫田三芳他 熊岡路矢他
東京事務所 (本部)	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計 総務, 情報収集および広報等 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC説明会～毎月第1・第3月曜日 午後6時から9時まで。	全国社会福祉協 議会 一般寄付	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢, 田島 誠 鴫田三芳, 佐々木志保 下藪宏司, 大野直樹 他約20名
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー等 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行		高塚政生(バンコク事務 所長), 本橋 栄 嶋 紀晶, 石橋節子 ボンビモン・チャイブーン 山西映子, 勝俣江美 カセム・スクタコ 他約10名

JVCの事業活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**— Japan International Volunteer Center は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**— 会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただきます。

- インドシナ難民救援募金**(6月小計 203,059円)タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - クロントイ・スラム募金**(6月小計 16,902円)バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - テグ・スラム奨学金**(6月小計 43,937円)バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - アフリカ難民救援募金**(6月小計 65,613円)ソマリアでの難民自立促進農業プロジェクト費として使われます。
 - レバノン被災民救援募金**(6月小計 500円)レバノン被災民に対する医療活動及び物資援助に使われます。
 - 日本語家庭教師募金**(6月小計 328,000円)定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - 医療募金**(6月小計 5,000円)緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
 - ボランティア募金**(6月小計 16,000円)現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - JVC運営経費募金**(6月小計 154,593円)現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- ▶**送金の方法**— 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

編集後記

▶編集する者として一番辛いことは、締切に追われて朝方事務所の寝袋にくるまることなく、原稿用紙をにらみつつレイアウトに頭を悩ますことでもない。読者からの反応がないことが一番こたえる。毎日届けられる郵便物の中から読者からのハガキを見つけようとするのだが、これがない。切手を貼っていないからだろうか、読者の興味をひきつける記事がないからだろうかと反省もしてみる。

とにかく情報の一方通行を避けるため、読者の皆さんには決して「受け手」にならないでいただきたい。この機関誌を、窓口として御意見や御希望をどしどし寄せてもらいたい。ぜひ本誌に反映させていこうと思う。ハガキでスペースが足りなければ、署名原稿でも大いに歓迎する。もしこのまま反応がないのであれば、私が鉛筆を折る日はそう遠くないと思う。

▶ソマリアから最新のレポートが届きました。農場建設も着々と進行しつつあり、モデル農場ではとうもろこし、オクラの収穫が始まったそうです。写真の緑が目にしみました。

▶T/E 38・39号。P.8「人は出すが金は…」→「金は出すが人は…」の誤りです。訂正してお詫びいたします。

昭和59年7月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下藪 宏司

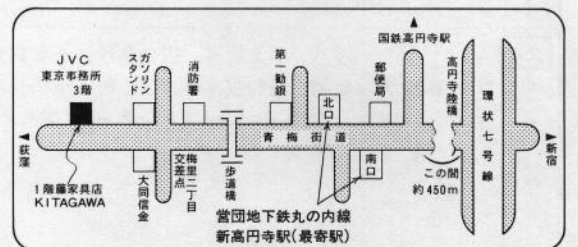
発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
 ☎ 03(316)3253

バンコク事務所 Japan International Volunteer Center, 67 South Sathorn Road
 Bangkok, Thailand
 ☎ (286)4857

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共 300円

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Center
 は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
 です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救援募金**(7月小計 3,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - クロントイ・スラム募金**(7月小計 5,500円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - デッグ・スラム奨学金**(7月小計 57,500円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - アフリカ難民救援募金**(7月小計 407,895円) ソマリアでの難民自立促進農業プロジェクト費として使われます。
 - レバノン被災民救援募金**(7月小計 1,500円) レバノン被災民に対する医療活動及び物資援助に使われます。
 - 日本語家庭教師募金**(7月小計 424,500円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - 医療募金**(7月小計 15,500円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
 - ボランティア募金**(7月小計 3,450円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - JVC運営経費募金**(7月小計 275,772円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - 無指定募金**(7月小計 1,150,229円)
- ▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

編集後記

▶40号を読んだ方々から、叱咤激励の手紙をたくさんいただきました。是非読者の「声」特集を掲載したいと思う。どうやら私は「鋼鉄の鉛筆」をプレゼントされたようだ。

▶JVCも設立されて5年目を迎えた。現在、あらゆる意味において総体的な活動及びその方針を見直すべき時期にさしかかっている。連日、今後の活動方針、人材及び自己資金の確保をめぐる議論が重ねられている。何にも犯されることのないJVCの理念は実践のためにある。

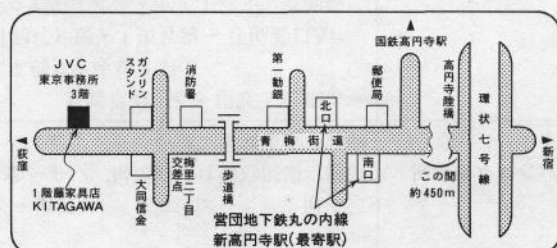
▶最近、新聞やテレビでアフリカの飢餓の惨状を伝える報道が増えているが、医師・看護婦の動きも活発になっている。この夏、金田衛医師(モザンビーク)、徳永瑞子看護婦(エチオピア)が、NTVの取材班に同行、調査。今秋には、エチオピアへ本格的調査団を派遣する。飛べ、医療人!

▶訂正とお詫び 38-39号 p.27, 安岡孝顕氏→保岡孝顕氏。40号 p.7, 栗本 鳳氏→栗野 鳳氏。

☆これまで項目無指定(無記名)の募金は、JVC成立の経緯から全てインドシナ難民救援募金として計上していましたが、高額になりつつあるため今月から新たに「無指定募金」を設けました。今後はJVC全体を支える募金として最も必要としている活動へと充当させていただきます。

昭和59年8月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下 園 宏 司
 発行人 星 野 昌 子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
 ☎ 03(316)3253
 バンコク事務所 Japan International Volunteer
 Center, 67 South Sathorn Road
 Bangkok, Thailand
 ☎ (286)4857
 印刷所 ㈱ベスト・プリンティング
 *本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共 300円